

令和八年十月号

《第百六十六号》

しろへび

宗教法人岩國白蛇神社

〒740-0017

今津町六丁目4-2

☎ 30-3333

かなづき
神無月の祭典・行事案内

【月次祭】九時半

十日（土）

二十二日（木）己巳

【神宮神嘗奉祝祭】

十七日（土）九時半



【マウス供養祭】十時 社務所二階

三日（土） 保存会主催

【昭和天皇御製】〈第二二四代〉

「明治神宮鎮座五十年大祭」

おぼろのきみのあつき病の枕べに母
とはべりしおもひでかなし

「七十歳になりて」三首

七十の祝ひをうけてかへりみれば
ただおもはゆく思ほゆるのみ
ななそぢを迎へたりけるこの朝も
祈るはただに国のたひらぎ
よろこびもかなしみも民と共にして
年はすぎゆきいまはななそぢ

（昭和四十五年）

【月次祭】 九月四日（巳の日）

月二回巳の日に斎行される月次祭も十三年もなると多くの方に認知され、この日も数十名の参列がありました。「大祓詞」を奏上し忌み衣を奉り拝礼が行はれました。この日は月初めであり、「小札」も授与されました。

祭典後の宮司



挨拶では、八月十六日に斎行された「白蛇供養祭（慰霊祭）」に關するお話でありました。以下、その内容を記します。現在「岩国しろへび」はおよそ八百頭の生息が確認されており、今年度に死亡した白蛇は昨年より多く二百八十一頭であったと報告がありました。約三十一%の減少であったと。その事がネット上でも話題となり、このままでは絶滅するのではないかとの記事が散見されてゐます。はつきりとした死亡の原因も明らかにされてゐません。

記録上約三百年以上この地に棲息し、地域住民の信仰にもとづき、今日まで神の使ひとして大切に保護され、平成二十四年には岩國白蛇神社が創建されるなど、今年年間に二十万人以上の参詣者が訪れる「錦帯橋」に次ぐ岩国の「名所」となつてゐます。世界に類例の無い「岩国のしろへび」の保護に全力で臨まなくてはなりません。皆さん方の御協力を切に望みます。（以下略）

【推薦図書】

『昭和天皇と感動の台湾』

三荻祥・郭双富・王佐榮 編著、江崎道朗 監修

写真で読む「東宮行啓」日本版

産経新聞出版 二五三〇円

奇跡によつて誕生した本 江崎道朗

この本は幾つかの奇跡のおかげで誕生した。大正十二年、昭和天皇は皇太子時代に台湾を訪問された。台湾では、現地の人たちが大歓迎をしてくれ、膨大な記録が残された。ところが日本の敗戦と台湾総督府の解体、つまり日本からの分離と中国国民党による統治の始まりという政治体制の急激な変化のなかで、その膨大な記録は散失してしまつた。にもかかわらず、郭双富という一人の台湾の方が戦後、私財を投じて当時の写真を買集め、その記録を収集してくれた。しかもその収集した写真を写真集として出そうと考えた、王佐榮という台湾



の方がいた。かくして皇太子時代の昭和天皇が台湾を訪問した際の写真集『東宮行啓』1923年裕仁皇太子訪臺記念寫真帖』が2019年に台湾で発刊された。

『続 巢鴨日記』

重光葵 著

続首台の傍らで見た敗戦日本の行方

ハート出版 一八〇〇円＋税

重光葵は戦前、上海天長節爆弾事件で片脚を失いながらも、上海事変停戦協定を成立させた。その後も外務次官・駐英大使等の立場で、三国同盟や対米英開戦の回避に努めた。戦中は外務大臣として大東亜共同宣言の実現に関わり、終戦時には日本政府全権として降伏文書に調印。東京裁判ではソ連の横やりによりA級戦犯被告とされ、禁錮七年の判決を受けたが、出獄後は副総理兼外相として日本の国連加盟を実現させた。『続巢鴨日記』は、東京裁判で判決を受けた翌日から、仮出所により鎌倉の自宅に帰る日までの約二年間、服役者として過

続

巢鴨

重光葵 著



日記

日本人必読!! 慟哭の日記 東京裁判の不条理を撃つ

重光葵 生誕140年 没後70年 追悼企画

山上信彦 解説

新字・新仮名遣い 文字が大きい 難読語に注釈

原書にはない写真 重光の遺筆イラスト 人物の肖像に注釈

ごした獄中の記録である。

東條英機ら七名の“A級戦犯”絞首刑執行、その後も続く“B・C級戦犯”の処刑、独房での過酷な扱い、冷戦の激化と朝鮮戦争の勃発、ソ連の異議に翻弄された保釈委員会、の審理などを冷徹に綴り、家族や旧友、詩友との交流を温かく描く、獄窓から国を

憂う心情は、本書に数多く収められた漢詩に託されている。(本書の紹介文より)

本居宣長

『直毘霊』を読む(十八)

言挙げせずとは、異し国のごと、こちた言ひ立つることなきを云ふなり。譬へば、才も何も、優れたる人は、言ひ立てぬを、なまなまの悪者ぞ、かへりていささかの事をも、ことごとしく言ひ挙げつつ誇るめる如く、漢国などは、道乏しきゆゑに、かへりて道々しきことをのみ云ひあへるなり。儒者はここをえ知らで、皇国をしも、道なしと輕しむるよ。(続く)

【現代語訳】

言挙げしないと言ふことは、外国のやうに仰々しく言ひ立てることがないことを言ふのである。例へば、秀才でも何でも優れたる人はむしろ言ひ立てないのに、中途半端ないい加減な者が僅かのことをも仰々しく取り上げて繰り返し言ひ、得意ぶつてゐるやうであるのと同じで、外国は道が十分であるために、逆に道理になつてゐるやうなことがかりを互ひに言ひ合つてゐるやうである。



「第三十回マウス供養祭」を迎へるにあたり「岩国白蛇」の命の糧は生きた「マウス」(二十日鼠)です。無菌状態で養殖され、千頭足らずの天然記念物「岩国の白蛇」を養つてゐます。

今から三十年前に始められた「マウス供養祭」の経緯については崇敬会の会報「まめびと」第二十四号に掲載されましたが、この社報においても再度紹介します。

『…観覧所を訪れる見学者から決まって質問されることがある。

「白蛇は何を食べているのですか?」「餌は何をやっているのですか?」「二十日鼠です」と答えると多くの人が

「エエ!可哀想に」とか「ねずみですか?」と大層驚かれる。…成

蛇には生後四〜六週目の、子蛇にはピンクマウスを毎週一回与えている。これら餌となるハツカネズミの総数は年間約三万匹に上る。しかし、いくら国の天然記念物白蛇の餌になるハツカネズミといつても、生きたねずみを直接与えている飼育職員や保存会役員にとつて、ねずみに対し憐憫の情を抑えきれない。

そこで、餌として犠牲となつた二十日鼠の供養祭を毎年十月二十五日前後に神式で行つてゐる。この供養祭には、理事・保存会職員・市の文化財保護課の職員合わせて約二十名が参列し、厳粛に執り行われる。』



白蛇保存会創立五十周年記念誌『白蛇をまもつて』より

※ 右の写真は令和六年十月の供養祭